
死亡フラグの回避方法を教えてくれ

T F E I

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死亡フラグの回避方法を教えてくれ

【Nコード】

N7479X

【作者名】

T F E I

【あらすじ】

どこにでもいると思われるハーフに見えないハーフ主人公・中崎勝。

とある理由でオオカミ系美少女に襲われたり、イノシシ系美少女に天井から吊られたり、ドラゴン系美少女に殺されかけたりと、ハーレム(?)という名の死亡フラグスパイラルに巻き込まれていく。中崎勝は最終的に死亡フラグを完済する事が出来るのか!? 死亡フラグ回避コメディ、ここに誕生です!!

MF文庫Jを意識して書いています。

エブリスタに同時投稿するかもしれません。

ブローグ

世の中には死亡フラグというものがある。

それは「俺、この戦いが終わったら結婚するんだ」とか「俺に任せて、お前らは先に行け」とかのセリフを言ったりすると立つというの一般的に知られているが……

……知られているのか？とりあえず知られているという事にするぞ？

他にも死亡フラグが立つ理由はあるが……

死亡フラグが立った場合、回避する方法はまず無い。

せいぜい苦しんで死ぬのが関の山だろう。

だが、回避できる方法があったとすれば？

あれば俺に教えてくれ。

何故なら俺、中崎勝は今死亡フラグ立ちまくっているからさ。

1・学校で会ったのはオオカミ系美少女！？

死亡フラグが立ったのは2日前——春も深まりだした時の事だ。

俺は純然たる16歳の高校2年生で、真面目というわけではないが、不良だったりひきこもりだったりという特殊なキャラではないので、普段同様学校に向かった。

そう、普段同様学校に向かったのだ。

しかし、いつもと違う事が1つあった。

いつも一緒に登校している、幼なじみというより腐れ縁と言った方が良いだろう関係である長宗我部晴美の姿が見えないのだ。

いつもなら食パンを口に加えながら、後ろからイノシシばりの勢いで突っ込んできて、躊躇なく俺の背中に飛び蹴りをいれてくるので、身構えていたのだが……

待っていても全く来る気配がないので先に行くことにしよう。どうせ遅刻だろうと思い、大して気にしなかった。

この時は、このミスであんな事になるとは思いもよらなかった。

所変わって学校。

「ガルルルルウウ」

「なんでこうなるんだーっ!!」

いきなりオオカミに追いかけてます。

(死亡フラグ 0 + 1 = 1)

そのオオカミはまるで縄張りに入ってくるなといわんばかりの勢いで吠えながら俺に向かって突っ込んできた。

その攻撃を直前で走る向きを90度変えてひらりとかわす俺。

毎日晴美で鍛えていた反射神経がまさかこんなところで役に立つとは……

と今ここにいない晴美に感謝しつつ、目の前のオオカミに目を向ける。

「ああー——ん」

するとオオカミが地面をも唸らすような大きく透き通った声で遠吠えを始めた。

「これぞまさしく負け犬の遠吠えかな」

まだ1回攻撃を避けたただけだ。

と、感心していると、ふと周りから俺を凍らせるような、かつ俺をロックオンしている視線を感じた。

それも1個ではない。

もしかしたら10匹以上いるかもしれないオオカミの群れ。

その大群が俺を取り囲んでいるのだった。

「「「「「「「「ガルルルウー!!」「「「「「「」

「スラムじゃないんだから仲間増やすのは反則だろ——っ!!」

あれか？

8匹揃ってキングオオカミになるのか!？

何だその生き物!？

…乗り突っ込みしてる場合じゃねえぞ俺!!

ともかく今は!!

「逃げる——っ!!」

しかし回り込まれた!!

「うが——っ!!」

この状況で俺はどうすれば良いんだ!?

選択肢はだな…

- 1 ・勇敢に立ち向かう。
- 2 ・土下座する。
- 3 ・近くの木に登る。

まともな選択肢が3しかねえ——っ!!

いや待て俺、3を選んだ場合どうなるか考えてからにしよう。

(ここからは中崎勝の脳内妄想です。ドラ○エ風になっているのは中崎勝の趣味です。)

if・3を選んだら

中崎勝は木に登ろうとした!!

しかしMPが足りなかった!!

中崎勝はもう一度木に登ろうとした!!

しかし中崎勝はそもそも特技『木に登る』を覚えていなかった!!

オオカミ達の攻撃!!

1208のダメージ!!

中崎勝は死んでしまった!!

DEAD END

(以上、中崎勝の脳内妄想でした。)

おう…危ねえ、死ぬところだった。

なら1か2のどちらを選べばいいんだろうか？

………そういやオオカミって頭良かったよな………、誠意を持って謝れ

ばなんとかなるんじゃないか？

（ここからは中崎勝の脳内妄想です。ドラ○エ風になっているのはやっぱり中崎勝の趣味です。）

中崎勝はナチュラル土下座を繰り出した！！

しかしオオカミ達は見向きもしなかった！！

中崎勝はスライディング土下座を繰り出した！！

オオカミ達は怒りだした！！

オオカミ達のテンションが200上がった！！

オオカミ達はスーパーハイテンションになった！！

オオカミ達の攻撃！！

12080のダメージ！！

中崎勝は死んでしまった！！

DEAD END

（以上、中崎勝の脳内妄想でした。）

ですね！。

オオカミに土下座の意味なんて分かるはずないな。

よっしゃ、ならーを選んだら…

（シッコいようですが、ここからは中崎勝の脳内妄想です。ドラ○
工風になっているのは中崎勝の趣味なんだろうしょうもないです。）

中崎勝の攻撃！！

オオカミ達はひらりと身をかわした！！

オオカミ達の反撃！！

1208のダメージ!!

中崎勝は死んでしまった!!

DEAD END

(以上、中崎勝の脳内妄想でした。)

全部DEAD ENDじゃねえか!!

なんのための選択肢だよ!!

ああ、もうどうしようもない!!

「俺…、この戦いが終わったら結婚するんだ…」

(死亡フラグ 1+1=2)

自ら死亡フラグ立てちまったーっ!!

「メディーックー！！（メディーックとはもうどうしようもないに使います。）」

（死亡フラグ 2 + 1 = 3）

あああああー！

「終わった…、俺の人生…。そんなに、悪くなかったぜ…」

「……どういふ事？」

「どういふ事ってそりゃあ、なんだかんだいって晴美っていう幼なじみにも恵まれて、楽しい生活を過ごせた……って」

誰だ独り言に乱入してきた新手のジンオ○ガはー！

声の主の方を見るとオオカミ達の中に1匹だけ、いや1人だけ、四つん這いの女子高生がいた。

騎士のように凛々しい目を持ち、スラッとしたモデル体型で我が校の可愛いと評判の制服をより一層際立たせているが、腰まで伸びているであろう銀髪がボサボサとなっていて、体にも所々に傷があるので、オオカミ系野生児という言い表し方が一番しっくりくる。

というか耳が生えていた。

そんな美少女がオオカミの群れに紛れ込んでいたのだ。

しかもこの美少女がボスであるらしく、彼女が1吠えするとオオカミ達はどこかに行ってしまった。

その後、彼女は四つん這いのままで勝を警戒しながら、襲った経緯について説明してきた。

最初に発せられた言葉は俺には全く意味が理解できないものであった。

「……縄張り」

「いや何の事がさっぱり分からないんだけど」

「……侵入者」

「いや、侵入者はむしろ君達だけれども」

「……私はこの高校の生徒」

オオカミ系野生児（美少女）は自らの制服を俺に見せつけながら、

コイツ馬鹿なんじゃないだろうかという目で睨んできた。

「だ、だろうね。でで、でもね、俺もなんだよ」

勝はその迫力に負けそうになったが、なんとか言い返した。

「……侵略者」

「何故そうなる！ー！ただ俺は1生徒として授業を受けに学校に來ただけだ！ー！」

「……今日は学校ない」

はい？

「な、何を言ってるんだ？が、学校ならここにあるじゃないか」

「……授業ない」

え~~~~つと？

「もも、もしかして今日はずっと自習なのかな？」

「……建立記念日」

待て待て、もしかして晴美が来てなかった理由って…

やっと言葉の意味を理解した勝は

「メ、メディック!!」

と叫ぶしかなかった。

(死亡フラグ 3 + 1 = 4)

いつの間にか死亡フラグが増えてるううううう!!

「……覚悟は出来たか」

「いやいやいや!! 今日間違って来ちゃったのは認めるけど、なん
で襲われなければいけないんだ!!」

「……縄張り」

1周した。

「だからそれがどういう事が分からないんだよ」

「……侵入者」

「ループする気がするからここらで止めようか」

「……私はここの守護者」

ええと？また変な方向に話が傾いたぞ？

「守護者って警備員ってこと？」

「……それでいい」

生徒兼警備員ってどういう事なんだ…？

「んで、生徒兼警備員さんはなんでまたこんなところにいるの？」

「……山主〓ウルフ〓凜世」

「え？」

「……私の名前」

なるほど、山主はクォーターであるらしい。

どおりで日本人離れたモデル体型であるわけだ。

「ええと、じゃあ山主」

「……凜世でいい」

凜世はムツとした表情で犬歯を出しながら主張した。

「ああ……うん、分かった、凜世。なんでここにいるの？」

「……ここは私の家」

……は？

「……デイスイズマイホーム」

「いや、英語にしくなくても分かるから。ええと、つまり凜世は学校に住んでいるって事？」

「……イエス、ママ」

「なんか違う気がするけど……、えっとつまり凜世は家出少女って事かな」

そう問うと、凜世は首を大きく横に振った。

「じゃあ学校に住んでるってどういう事だよ」

「……………」

「おいおい、俺は殺されかけたんだぞ、それぐらい教えてもらっても別に罰は当たらないはずだ」

「……………」

しばらくの沈黙の後、ようやく凜世は重たい口を開いた。

「……家、ない」

あれ、コレ聴いたら駄目なヤツ？

「ああ…、あの、その、なんだ。スマン」

「……………」

「……………」

また沈黙が俺達を包む。

(ぐう~~~~~つつ)

その沈黙を破ったのは凜世のお腹の音であった。

「えっと、お腹減ってるの？」

「……減ってない」

「いや確実に減ってるよね、お腹鳴ったよ」

「……鳴ってない」

「いや大きな音が鳴ってたよね」

「……オナラ」

「自分を汚してまで嘘をつく必要性はないと思っただが」

「……嘘ではない」

「あーっ……分かったよ、俺はウツカリここに今日の昼ご飯になるはずの弁当を落とした。凜世はそれを拾った。OK？」

「……占有離脱物横領罪」

説明しよう！

占有離脱物横領罪とは横領罪の一種で、遺失物、漂流物その他占有を離れた他人の物を横領する罪である！

法定刑は、1年以下の懲役または10万円以下の罰金もしくは科料である！

（ウィキ○ディア調べ）

「ああ、もうどうしたらいいんだ!!」

「……、（バタツ）」

「え!!ち、ちょっと大丈夫!? 凜世!!」

返事がない、ただの屍のようだ。

なんだ、ただの屍か……。

「って駄目だろ！！今すぐ保健室に運ばないと！！」

と思って、凜世を持ち上げようとしたが、そこで問題が発生した。

どこ持てばいいの？

お察しの通り、凜世は四つん這いだったので、当然前のめりになっている。

そのため、持ち上げようとすると、あの、いろいろ必然的に触ってしまうのだ。

（落ち着け中崎勝！！相手は気絶している！！触ってしまうのは不可抗力だ！！）

こうして、中崎勝は理性をギリギリ保ちつつ、凜世を保健室に運ぶのだった。

さてさて、日も次第に落ちてきた頃…

「……んっ」

「ああ、目が覚めた？」

「……ここは？」

「保健室。幸い、鍵は開いていたからね」

開いているのはむしろ問題があるが。

「……何故？」

「何故って？」

「……助けた理由」

「ああ…、そりゃあ目の前で人が倒れたら、介抱ぐらいするでしょ」

「……襲ったのに？」

鳩が豆鉄砲を食らったような顔をして俺を覗き込む凜世。

「そんなの関係ないって。まあ、襲われるとは思ってなかったけど……」

「……ゴメン」

「いや、ケガ一つ無いからいいんだけどね」

精神的ダメージと死亡フラグ4つ食らったがな。

「……責任、とる」

何この展開！？

もしかして命令したらあんなコトやこんなコト、更にはそんなコトまでしてくれるのか！？

これなんてエロゲ！？

「……群れに入れ」

ん？何か不穏な空気が流れてるような……

「えっと、それはどういう意味でしょうか？」

「……一緒に暮らせ」

えっと、これはもしか噂のプロポーズというものだろうか！？

えっ！？俺、保健室に運んだだけですよ！？特別なこと全然してないですよ！？

こんな美味しい話があるだろうか！？いやない！！（反語）

よし、ここはやりわり断ろう。

「でも、俺にも家があって、家族とかが心配するだろうし」

あ、因みに俺は2才下の妹と2人で暮らしている。

両親については伏せておこう、つーか喋りたくない。

「……なら夜だけ」

状況が更に悪くなったよ!?

「えーっと、つまり夜のお供をしろと、そう言いたいわけですね？」

「……そう」

超絶展開キターーー!!

「宜しく願います!?!?!」

こ、これは罠であろうと、はまらざるを得ないっ!!

コンピューターウイルスに感染するかもしれないのにエロサイトを巡回するみたいなものだ。

「……なら」

すると、凜世は俺の胸ぐらを両手でぐっと掴んで、そのまま俺の顔を凄まじい膂力で引き寄せたかと思うと、

「……狩りに行くぞ」

と言って俺を引きずり出した。

——俺の唇に凜世のソレを——って展開じゃねえのかよ——！

とちょっとキレつつ、いきなりキスされなかったことに少し安堵していた。

って、狩り？

てことは…

「やっぱりこうなるのかあああああああああ!!」

熊に追われている自分がいました。

自分でも馬鹿だったと思います。

狩りは朝まで続いた。

死ぬかと思った。

熊に襲われたかと思ったら、蛇に絡みつかれるわ、コウモリに噛みつかれるわで大変だった。

凜世はというと……

「……ん」

その熊と蛇とコウモリを丸焼きにしていた。

化け物かよ…。

明日からもこんな心臓に悪いことが続くのか？

「……明日来なかったら」

「来なかったら？」

「……この熊のようになる」

と言って、木の棒に刺した熊の丸焼きを俺に向かって突き出す。

こうして俺に死亡フラグが立ったのだった……トホホ…。

2・朝襲ってきたのはイノシシ系幼なじみ!?

オオカミみたいな美少女に襲われたあげく、その美少女に日が昇るまで狩りに駆り出された後。

俺は帰ってる暇がなかったので、そのまま校舎の4階にある自分の教室に行き、1番乗りだったらしく、窓側の1番後ろという、絵に描いたような特等席である自分の机で突っ伏した。

にしても…

眠い。

眠い眠い。

眠い眠い眠い。

眠い眠い眠い眠い。

眠い眠い眠い。

眠い眠い。

眠い。

なんだかんだで徹夜した挙げ句、家にすら帰っていないため、心身共に疲れ切っていた。

ここで寝てしまっても、罰は当たらないだろう。

というわけで、目を閉じて授業が始まるまで睡眠を取ることにした。

さて、ここで過去の話でもしようか。

これは俺が9歳の頃だった。

今でこそ乱暴でイノシシでついでに巨乳となった俺の幼なじみ、晴美だが、9歳の頃は正義感の強く、元気な女の子だった。

俺はというと...

イジメにあっていた。

それは強者が弱者を痛めつけてからかうという、至ってノーマルかつシンプルなイジメだった。

そんなイジメからいつも晴美が助けてくれたっけ。

それで助けた後、決まって俺に言うんだ。

「そんなコトだとアンタ死ぬわよ」

俺はこの言葉を最初はあまり気にしていなかったが、何度も言われていたせいか、その気になっていた。

それからというもの、俺は毎日晴美とトレーニングに育んでいる。

それは今であっても変わらない。

1日でもサボれば、死ぬより怖い拷問が待っているっていつから尚更だ。

……っ
ってあれ？

昨日トレーニングしたっけ？

……嫌な予感がする。

何か、北北西の方あたりから殺気を感じるのだが……。

「まああさああるううううううう！！」

（死亡フラグ 4 + 1 = 5）

ガバツと起きて直ぐに臨戦態勢に入る俺。

俺の選択肢は……？

そこに天から3つの選択肢があ！！

- 1 ・窓から飛び降りる
- 2 ・バリケードを造る
- 3 ・自尽する

あれ？

直接闘うという選択肢はないの？

もしかしてマトモに立ち向かうと死ぬってことだろうか……。

……怖っ……。

……って、んなこと考えるより、今は選択肢のシュミレーションが先だ。

さて、先ず1は…

（毎度毎度スイマセン。ここからは中崎勝の脳内妄想です。ドラ○工風なのは揺るぎません。）

if・1を選んだら

晴美はまだこちらに気付いていない！！

中崎勝は窓から飛び降りた！！

中崎勝に5348のダメージ！！

中崎勝は死んでしまった！！

DEAD END

（以上、中崎勝の脳内妄想でした）

……うん、分かってたよ、死ぬことは。

飛び降りたら死ぬというのは一般常識であり不変の真理なわけで。

神様はなんでこの選択肢を残したんだ？

俺に死ねと？

……という事は、もしかして既に死亡フラグ確定？

いやいや、まだ諦めないぞ、2を選んだらどうなるかまだ分かっていないんだから。

（これからは中崎勝の脳内妄想です。この説明が面倒くさくなってきました）

if・2を選んだら

晴美はまだ気付いていない！！

中崎勝は机を入り口付近に積み上げた！！

晴美は入り口の机を蹴飛ばした！！

中崎勝は机の下敷きとなった！！

中崎勝に∞ダメージ！！

中崎勝は死んでしまった！！

DEAD END

（以上、中崎勝の脳内妄想でした）

……。

やっぱり死ぬじゃん。

3を選べば死ぬのは自明の理っていうか、自尽だから自ら死を選んでしまってるし…。

うん、最後はキメゼリフと共に華々しく散ろう。

せーの。

「メディーーク!!」

(死亡フラグ 5 + 1 = 6)

俺が叫び声をあげたのと同時に、晴美が教室に飛び込んできた。

そして俺を見つけるやいなや、イノシシのような茶色い髪をなびかせ、無駄にデカイ胸を揺らしつつ、チーターもびつくりの速さで間合いを詰め、喉元に手刀を突き付けながら、

「ねーえ？なんでこんな状況になってるか分かってるわよねえ？」

「もも、もちろん分かってるって!!」

「ああ？なんだその態度はあ！！」

どうやら怒りの琴線に触れたらしい。

「もちろん存じ上げております！！」

「でえ？誰の責任だつて？」

「私めの責任でございます！！」

「そうだよねえ？バカでアホでマヌケでノロマでクソで……、えつ
ーと、……バカでアホでマヌケでノロマでクソな勝が悪いんだよね
え？」

語彙力が無くて説得力の無い罵倒をする晴美。

「もうちよつとき、ビッチとか唐変木とか木偶の坊とかイロイロある
だろ？」

「バカでアホでマヌケでノロマでクソでビッチで唐変木で木偶の坊
の勝に情けをかけられる筋合いは無いわ！！」

とか言いつつも、ちゃっかり恩恵をもらっている晴美。

「だいたいね、勝が弱いから私が付きつきりで指導してあげてるっていうのに、生徒からボイコットってどういう事よ!！」

「違うんだ、話を聞いてくれ!！」

「ほおー、私の納得する解答でなかったらどうなるか分かってるわよね?」

「あ、ああ……。なら言っぜ? 昨日建立記念日と知らずに学校に行ったらだな、オオカミみたいな美——」

とまで言ってから気が付いた。

凜世に別れる前にこう釘をさされたのだった。

——他の生徒に言ったら串刺しにして丸焼きにして、『上手に焼きました』と言ってから食べてやる——と

あ、もちろん後半は自分の言葉だ。

というわけで、ここで事実を言うと死亡フラグが確定するのだ。

「早く言いなさいよ」

「び、び、そうだ！！ピーカーが空から降ってきて大変だったんだよ！！」

「んなわけないでしょ！！本当の事を言いなさい！！」

んー、流石に嘘って分かるか…。

じゃあ…。

「ビックリ人間が目の前を通り過ぎたから尾行してたんだよ！！」

「……で？結局はどうなの？」

冷たくアシラわれた。

クソ…、言っても凜世に殺されるし、言わなくても晴美に殺されるし……

つまり本当っぽい嘘をつけば良いんだよな。

ならば!!

喰らえ!!

「ビ、ビ、ビッチだったという事実のあまり気絶していたんだ!!」

どうだ!! 自虐ネタだぞ!!

さっき罵倒に使われたを有効に活用し!!

しかも声を震わせて言いたくなかった事を演出!!

見事なまでの本当っぽい嘘だ!!

勝った…、勝ったぞ!!

「ああ、そう、なるほどね」

「分かってくれたか」

「勝が殺されたがつてゐるって事がねえ!!」

「良かったってえええええええええ!!」

その直後振り抜かれる右腕。

警戒態勢を取り払ってしまった俺はなす術もなく、みぞおちにクリンヒット!!

「————ツツツツツツ!!」

声にならない悲鳴が教室にこだまする。

続けざまに左手で首をつかまれたかと思うと、そのまま後ろに回り込まれ、無理やり押し倒された。

そしてマウントポジションを取られた俺は文字通りなす術も無くな
った。

「私もね、こういうことしたくないのよ？ただ、勝の将来のために
更正させて道から外れたのを元に戻す義務を幼なじみは負っている
からよ！！」

「いや、少なくとも権利だろ」

「いいえ義務だわ！！って事で今日から勝を監視するわ！！」

え？

「あのーっ、それはどういう？」

「24時間私が勝を見続けるって事よ！！」

ええええええええええ！！

ストーカーか！！

ストレス溜まって死んでしまうわ!!

というかそんな事されたら…、凜世に殺される!!

どんだけ死亡フラグ立つんだよ…。

と、自分の人生を悔やみつつ、断る方法を考えてみる。

せめて条件がマシになれば良いのだが……。

ああ、そうだ!!

「せめて放課後だけにしてくれないか？」

「何だよ？」

と疑惑の目を向けてくる晴美。

「そりゃあさあ？特訓っていつも放課後にやってるじゃん？その延長的な感じでやったら楽なんじゃないか、っと思って」

というか凜世と鉢合わせしたら面倒なので。

「ううん」

まだ折れてくれない様子。

「人格に関しても特訓するって思えばいいでしょ」

「ん…、そう、そうよね」

やっと納得してもらえたご様子で。

「ていうかなんでここまでしてくれるわけ？たかがただの幼なじみ
だろ？」

「たかがじゃないわ！……（それ以外勝との接点がないのよ）…
…」

「ん？なんか言った？」

「そんな事どうでもいいでしょ!!」

「いや、気になるだろ」

「お互い様でしょ!!」

「まあそりゃあそうなんだが」

「とりあえず今日から始めるから覚悟しなさい!!」

まじか…。

そして放課後。

縛られて天井に吊られています。

晴美曰わく。

「人格っていうのは人生における経験によって形成されるものなの。つまり、強い人格の人が過去にした経験をさせれば自ずとそうなるのよ」

「何か間違っ てないよう で間違っ てるよう な…」

「口答えしない！！私の言うとおりにしておけばいいの！！」

「へいへい、分かりましたよ」

「一応言っておくけど、この特訓を次すっぱかしたら——」

「すっぱかしたら？」

「——血を見るわよ」

晴美はそう言っ て何処に仕込んでいたのか、ナイフの刃をこちらに向ける。

…。
こうして、俺の死亡フラグは日に日に増していくのだった、トホホ

3・オオカミ美少女との第2夜。

幼なじみにロープで縛られて吊されるという特殊なプレイが終わった後…

いつの間にか空が赤に染まり、カラスの鳴く声が聞こえた。

流石に夜まで延長という事はしないらしく、

「扱き疲れたから帰るわ」

と言って帰っていった。

俺はというと凜世と狩りに行かなければならないので、凜世に会わなければならないのだが…

「……？」

「いや、だって耳生えてるし」

「……これ？」

凜世は自らの頭を指差す。

するとおもむろに耳を取り外し…、って

「ええええええええええ！！」

ケモノじゃなかったのかよ！！

そりゃありアルにケモノがいたら怖いけども！！

アニメの主人公の中の人がおバサンだった時や、ゆるキャラの中からオッサンが出てきた時のような残念感がこみ上げてきた。

「そ、それは？」

「……オオカミ耳」

「ま、まあそりゃあそうだろうけど。な、なんでそんな物付けてるの？」

「……父親が、」

「どんな趣味！？」

「……群れに馴染むには形からって」

ああ、って父親はオオカミの群れに入る事推進してんだな…、どんな父親だ？

「因みに父親はどういった職業を…？」

「……？昨日いた」

え？

「昨日つてオオカミしか見てないんですが」

「……そう」

父親がオオカミイイイイイ！？

「ああ…、一応聞いておくと母親は？」

「……人間」

流石にね！！

オオカミ♂×オオカミ♀≠人間だしね！！

……つかオオカミ♂×人間♀って何！？

禁断の恋にも程があるでしょ程が！！

ってというか戸籍はどうなってるの！？

確かクォーターじゃなかったっけ!?

もし仮にオオカミ×人間なのだとしたら1/4オオカミ+3/4人間なのか!?

「えっ…と、その、色々訳が分からないんですが」

「……Don't think, feel」

「いや、どこその映画スターの名言を引用しなくてもいいから」

ブルー○リーね。

「……考えるな、感じる」

「いや、別に和訳してもらわなくても分かるから」

もう何も考えない事にしよう、最早何も考えたくない。

「……質問終わり?」

「ああ、もうどうでもいい」

こうなりやヤケクソだ。

「……なら狩りに行くぞ」

「オオーーーーーッ!!」

結果。

「結局こうなるのかあああああああ!!」

やっぱり熊に追われています。

どんだけシツコいんだよこのアオ○シラ!!

……今度、武器でも持ってこようかな。

いや、防具からの方がいいか。

とりあえずユク〇の木でも拾いに行った方がいいかな。

と脳の片隅で割と真剣に考えつつ逃げ回っていた。

「……因みに父親はアレ」

「今言います！？それ！！」

てかアレってどれ！？

「ガルウウウ」

「ガルウウウ」

「ガルウウウ」

「ガルウウウ」

「ガルウウウ」

「いや鳴かれても分かんねえよ!!」

鳴き声全部同じじゃんか!!

分かる方がすげーよ!!

といったようなプチハプニングも有りながら、朝まで狩りを続けた。

この狩りで分かったのは、人間死ぬ気になれば何でも出来るものだね、って事だ。

お気付きの方もいるだろうが、俺は2徹したのだ。

なのに走る気力があつたのだから、自らアップレと言わざるを得ない。

それはそうと、凜世っていつ寝てるんだろうか？

これは今後に役立つ情報が得られるかもしれない。

「凜世」

「……？」

さっき狩ってきた熊の肉を持って応対する凜世。

「いつもいつ寝てるの？」

「……授業中」

はい、駄目人間発言頂きましたー。

「ええと……勉強とか大丈夫なの？」

「……大丈夫だったら怖い」

お、これは狩りを回避するチャンスかもしれない。

「ならば、明日の夜から勉強教えてあげるよ、中間考査も近いし」

説明しようー！！

我が校は3学期制であり、5月下旬、7月中旬、10月中旬、12月上旬、3月上旬に定期テストがあるのだ！！

今は5月中旬にあたるため、中間考査までもう時間がないのだ！！

b y・校長

「……いいの？」

「いいのいいの！俺自身復習になるしね」

俺は実はそこまで勤勉じゃないのだが、熊に追いかけるよりはマシだ。

「……なら明日から」

（死亡フラグ 6 - 1 〃 5）

キタアアアア！！

初めての死亡フラグ回避成功！！

これは大いなる進歩じゃないか？

この調子で行けば死亡フラグ完済出来るかもしれない。

まあ、でも体調が万全でないとしもの時大変だし、明日っていうか今日は休みだから家でゆっくりしよう。

「じゃあ明日の夜、俺の家で……って知らないよな」

「……匂いで分かる」

「マジかー!!」

凜世はFBIの特殊部隊かそれに準ずるモノになるべきだと思う、きつとコイツなら最前線で活躍してくれるはずだ。

「じゃ、じゃあとりあえず明日の夜に匂いを頼りに探し出してくれ」

「……イエス、ママ」

「だからなんか違うけどね」

とまあ約束をしたところで勝こと俺は、この後起こる大惨事の事も知らずに意気揚々と家に戻ったのである…。

4・家で待ち構えていたのはドラゴン系妹！？

前述したが、さり気なく言ったので忘れている人も多いと思うので重ね重ね述べると、俺には2才下の妹がいる。

俺には似ても似つかぬような金髪でルックスも平均より遙かに上。

なおかつ学校の定期テストでは平均95点で、所属している空手部を全国大会まで導くという文武両道。

動物で例えるならば、伝説の動物『龍』を彷彿させる。

それが俺の妹、中崎まひるだ。

髪の毛の色が金色なのは義妹だからと言うわけではなく、単にイタリア人の母親からの遺伝だ。

なんで俺達兄弟は一応ハーフって事になる。

妹はその髪の毛のせいかなーフだと気付かれるみたいだが、俺は父親の遺伝で黒髪100%という、父親から産まれたんじゃないかと思いたくなるぐらい母の遺伝を受けなかった。

そのせいか、ハーフだと気付かれた事は一度も無く、知っているのも身内と晴美ぐらいだ。

とまあ、平凡な俺とはことごとく違うまひるな訳だが…、

こんな妹でも駄目な所はある。

それはこれから起こる事で分かるであろう。

学校から所変わって中崎家玄関。

俺は正直ドアを開けるべきか悩んでいた。

なぜって丸2日も家をあけ、その間連絡すらしなかったからだ。

つまり家に妹を1人置いていったという事になる。

なので妹が怒ってないか不安なのだ。

というか確実に怒っている。

何故なら…

「兄様はまだカアアアアアアアア！」

(死亡フラグ 5 + 1 = 6)

叫び声が外まで響いてるからね。

家に入った瞬間跳び蹴りを食らうのが関の山だろう。

せめて気付かれないように自分の部屋にまで辿り着けば休戦協定を結べるだろうから、2階の自分の部屋に妹から気付かれずに入れば、跳び蹴りフラグ、大げさに言えば死亡フラグを回避できるのだ。

そしてここでの選択肢は下の3つだ。

- 1 ・木によじ登って飛び移る
- 2 ・謝る
- 3 ・このまま失踪する

…… 3はないな。

って事で恒例の脳内シミュレーションタイムだ。

(中崎勝の脳内妄想にしばらくお付き合い下さい)

if・1を選んだら

中崎勝は木に登ろうとした!!

しかしMPが足りなかった!!

中崎勝はもう一度木に登ろうとした!!

しかし中崎勝はそもそも特技『木に登る』を覚えていなかった!!

中崎勝は悪あがきをした!!

中崎まひるに見つかってしまった!!

中崎まひるの跳び蹴り!!

中崎勝に1888のダメージ!!

中崎勝は死んでしまった!!

DEAD END

(以上、中崎勝の妄想タイムでした)

何コレデジャヴユ。

というか跳び蹴りで死ぬの?

何気にオオカミに攻撃されるよりダメージが大きいのだが……。

2を選んだ場合はどうだろうか……。

（中崎勝の妄想タイムの始まり始まりっ）

中崎勝はドアを開いた！！

中崎勝はナチュラル土下座を繰り出した！！

しかし中崎まひるは見向きもしなかった！！

中崎勝はスライディング土下座を繰り出した！！

中崎まひるは怒りだした！！

中崎まひるのテンションが200上がった！！

中崎まひるはスーパーハイテンションになった！！

中崎まひるの攻撃！！

18880のダメージ！！

中崎勝は死んでしまった！！

DEAD END

（以上、中崎勝の脳内妄想、もとい死亡妄想は終了いたしました）

何コレデジャヴュ・パート2。

んでやっぱりオオカミより攻撃力高いし…。

オオカミに襲われた時に死んだ方が楽に永眠出来たかな…。

と考えてる内に、

「……」

家から響いていた怒鳴り声が静まった。

これは正面突破の方が成功する確率が高いんじゃないだろうか？

これ以上立ち往生していても時間の無駄遣いだし。

と思い、意を決して玄関のドアを開いた。

するとそこには――

「お帰りなさい」

エプロン姿のまひるが立っていた。

「おお……、ただいま」

突然の事で少し戸惑ってしまったが、殺される事はないようだ。

「まひるにお風呂で限界まで煮られたいですか、まひるに料理されたいですか？それとも……、」

「ちょっと待ってまひる。今の選択肢だとお兄ちゃん死んじゃうしか無いと思うんだけど」

「だって息を止めることしか考えてませんから」

「怖いよ……因みに聞いておくけど『それとも』の後は何て言おうとしたの？」

「まひるの隣で永遠に眠りますか？」

「聞くまでも無かったみたいだね……、で何故俺が殺される運命になってるわけ？」

「何故かと言いますと、まひるの大事な兄様が帰ってこない理由はまひるに何か至らぬ点があるという事なんじゃないかと思ひまして、2日間寝る間も惜しんで熟考いたしましたが、皆目見当が付かず、それならばと思い、最終的に諸悪の根元である兄様をこの世から消せば一件落着なんじゃないかという答えに辿り着きまして」

「全然一件落着じゃないよ！！お兄ちゃん死んでるよ！！原点に戻りすぎて犯罪に手を染めようとしてしまってる事に気付こうね！！」

「兄様を守るためならたとえ兄様であろうと邪魔はさせません」

「矛盾してるよね！！肝心なお兄ちゃんの人権その他諸々が守られ

てないよね!!」

「兄様は何もなさらなくても結構です、ただまひるに介錯されるのを待っていいいいのです」

「おーい、まひる？聞いてる？」

「兄様はどの方法で最後を迎えたいですか？首吊りですか？切腹ですか？飛び降りですか？自爆テロを起こしますか？いっそのこと青酸カリでも服用しますか？」

「死なないから!!それと別にまひるが悪いなんて事は何一つ無いから、安心して!!」

「兄様の事を考えると安楽死が一番良いかと思しますので、安楽死専用の薬を作ってきます」

ああ…、全く話を聞いていない…。

こうなったら実力行使でもしない限りまず止まらない。

そう、俺の妹こと中崎まひるは世間一般で言う『ヤンデレ』という

ヤツなのだ。

いや、もしかしたらただ病んでいるだけなのかもしれない。

まひるは前述の通り、完璧超人なのだが、そのせいか頼られる事が多くなった。

まひるもその期待に全て応えようとした為、責任感が人より数十倍ほど強く育った。

それが強すぎたせいか、何か少しでも不具合が起これるとなんでも自分のせいだと思ってしまいうらしい。

それで思い詰めた結果、曲解を出して失敗してしまう。

それがまひるの駄目な点なのだ。

こういう暴走をすると兄である俺が何とかしなくてはならない。

というか今回の場合は直接的な被害があるわけだが……。

その対処方法とは…

くすぐる事だ！！

「安楽死と言っても種類がありまふっ、ヒヤヒヤヒヤヒヤ！ハハハハハヒヤヒヤヒヤヒヤ！止めてくだ、ひゃい！！ヒヤヒヤヒヤ！！」

「ならまず冷静になるんだ！！」

たちまち形勢が逆転した。

元々はまひるを笑わしてやりたいと思ってやり始めた事だったのだが、思いのほかくすぐりに弱いらしく、暴走を止める時に使い始めたわけなんだが……

端から見ると変態だね。

「わっ、わかりまつ、したからっ、ヒヤヒヤヒヤ！！止めてっ、くだっ、ヒヤヒヤヒヤ！！い！！」

「やり方が分からなくなった時いち早くお兄ちゃんに相談すると誓えるか？」

「誓いまっ、フヒヤヒヤヒヤヒヤ!」

「さっきはご迷惑をお掛けして申し訳ありませんでした」

まひるがひとまず落ち着いたらしい。

「まあ、いつもの事だし良いよ」

いつもの事なのは駄目だと思うが。

まあ、誤魔化す事も出来たわけだからいいか。

「それはそうと、昨日は一体どちらに？」

誤魔化せてなかった。

「いや、それはアレだよ、アノ…、いや、ソレがアレで」

「代名詞の使い方を1から勉強し直したらどうですか」

でも口が裂けても凜世と夜な夜な狩りをしていたなんて言えない!!

でも言わないと多分殺される!!

これなんて無理ゲー？

「もしおっしやらないのなら…」

お？この展開は巷で噂のデジャヴュですかい？

『監視する』とか言い出して、実際にはお兄ちゃんの隣にいたいだけなんだろ？だろ？であれ!!（願望）

……うん、ないな。

「なら？」

とりあえず話を聞かないことには一向に事態は收拾しないから、必要最低限の文字数で尋ねてみる。

まひるの言うことは予想通り、予想（願望）とは全然違った。

「兄様を再教育します！！」

「いいよ」

「即答ですか！！」

いや、だって再教育って保健体育もあるんだろ？

んで、実技もしてくれるんだろ？だろ？であれ！！

「多分考えている事とは違うと思いますよ？」

「え？裸になってくれないの？」

「なりません！！一体どうしたらそんな結論に至るんですか！！」

さっきまで曲解を出してた人が言うセリフですかね。

「まあいいです！で、再教育の方法とはですね……」

10分後。

「え〜、なんでこんな事になってるんでしょうか、まひるさん」

「兄様がまひるに振り向いてくれないからなんですよ？」

ここで俺がどうなっているのかを説明しよう。

まひると抱き合った状態でロープに縛り付けられてる。

え？分かりづらい？

言うなれば、カップルが抱き合っているのをロープで外せなくしたような状態。

そういう、相手が妹でなければなんとも羨ましい状態になってるのだ。

「いや、いろいろ理解出来ないから」

「理解なんかしなくて良いんです、ただまひるの言っている通りにしていれば良いんです！！」

「じゃあ一応聞くけど…、これにはどういった意味が？」

「吊り橋効果つてありますよね？」

「ああ…、確か不安定な場所のドキドキを相手への恋心だと勘違いするってヤツ？」

「はい、それを実践しています」

はい？

……不安定というか動きづらいただと思うが。

「って事は妹に恋心を持てと？そう言いたいわけですね、まひるさん」

「はい！！最終的にはまひるしか見えないようになってもらいます！！」

「却下」

「即答ですか…、でもこの状態を続けていけば必ず！兄様はまひるに振り向いてくれる事でしょう！！」

「……無駄だと思うけどね、気の済むまでやってみたら？」

「はい！！」

とまあ、こつこつ訳で。

俺は家にいる間、風呂（流石に拒否した）以外は妹と抱き合ったまま生活するようになったのだ……。

5・竜狼相搏つ!?

次第に暗くなってきた頃…

俺は唯一自由が認められた風呂場にいる。

一通り体を洗って熱々の湯船につかり、これまでの3日間で起きた出来事を整理してみた。

まず建立記念日と知らずに学校に行ったらオオカミに襲われた。

これがすべての元凶だったんだよな…。

んで凜世に会って狩りに連れて行かれた。

熊を狩るとかこのハンターなんだよ凜世は。

次に晴美に殴られた。

あれで死ななかったのは奇跡と言っても良い。

それから天井に吊り上げられて……

なんでだろ、この3日間自分の人権が一切守られていないような気が……。

まあそれから凜世ともう一度会って、勉強会をする事になって、俺の家に……。

って、

「忘れてたあああああああー!!」

(バンッ)

「どうかしましたかあ兄様!!」

「何でもないから風呂場に入ってくるなああああああー!!」

「まひるはいつでも準備万端ですよ?」

「訳分らない事言っ
てないで早く出て行けえ
ええええええええええ
ええええ!!」

「すみません冗談です！！ただ一刻を争う事態がありました……」

「おお…、何だ？ツマラナイ事だったら兄妹の縁を切るぞ」

「それだけは勘弁下さい！……もし縁を切られるような事などあれば、まひるも兄様の首を切らざるを得ません」

「怖いよ!!」

「大丈夫です、まひるもその後お供いたしますから」

「どこが大丈夫なんだ!! さっきのは冗談だから止めてくれ」

「本当にですか？」

子リスのように縮こまり、か細い声で再確認するまひる。

「ああ、冗談だよ。だから話してごらん」

抱き締めたい感情を抑えられなくなるから。

「それがですね…、オオカミが家の周りを囲んでいるみたいなんですよ」

何ですと!?

凜世の奴、一家総出で来やがった!!

「ああ……、ちょっと待っててね、服着るから」

「分かりました、お手伝いさせていただきます」

「いやいやいや!!大丈夫だから、外で待ってて!!」

もう既に危ない状況なのに、それ以上されたら理性とか何やらがぶっ飛びそうだし!!

「そうですか……、まひるは兄様の召使いすらさせてもらえないのですね。という事はまひるは奴隷、または人間ではない、つまり生

きている価値は無いのですね」

「いや、そんな事言っただけでいい」

「かくなる上は身投げも辞しません、今まで本当にありっヒヤッヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

全力でくすぐり倒した。

やはりこれからは早めに策を打つべきだな。

「……部屋で待っていてくれるね？」

「ハヒヤヒヤヒヤヒヤ！ヒヤッヒヤッ、ヒヤい！！分かりヒヤヒヤ！……止めっ、ヒヤヒヤヒヤヒヤ！……」

結果、兄の圧勝。

という事で、まひるはそのまま部屋に戻り、俺はというとさっきまで着ていた私服を洗濯機から出してもう一度身に着け、玄関へと走った。

だが、手遅れであった。

何故なら……

（バコーン！！！！）

扉が吹っ飛ばされたからね。

「……只今参上」

「せめてもうちょっと違う入り方をして欲しかったな……」

ああ……、ドアってどう修理するんだろ。

「……鍵が掛かっていた」

「だったらインターフォンを押すなりしてよ」

「……？」

「え？もしかしてインターフォンを知らないの？」

「……（コクン）」

ドコゾの原始人！？

まあ、野生生活してたんだから知らなくても無理はないか。

「よし凜世、一旦外に出よう」

文明の利器とやらを教えてやらんとな。

「これがインターフォンだ、ココを押してみて」

「……ココ？」

細く、しなやかな指でインターフォンのボタンを押す。

すると、

(ピンポ~~~~ン)

と、馴染みの音が家の中にこだまする。

「……!?!?!」

(ピンポ~~~~ピンポ~~~~ピンピンピンポ~~~~ン)

凜世はかなり驚いたらしく、ボタンを連打しては、目を皿のようにしていた。

こういう光景を見ると、子供に教えてるみたいで何だか和むな。

と思ったのもつかの間。

「インターフォン鳴ってますよ兄様」

まひるが出てきてしまった。

「ガルルルルウウ」

即座に臨戦態勢に入る凜世。

「何ですか、兄様に危害を加えるのなら容赦しませんよ!!」

こちらも構えるまひる。

「待て待て待て待て!!」

「ガルルルルウウ」

「……行きます!!」

両者が間合いを詰めにかかった。

ああ、もう……無理だ。

さあ皆さんも一緒に。

「メディーークー!」

(死亡フラグ 6 + 1 = 7)

その後、まひるに実力行使もといコチヨコチヨを繰り返して一旦コトは収まったのだが……。

「兄様、これはどういう事が説明して下さい」

「……どういう事？」

誤魔化せなかったみたいです。

「ああ……、ええ……、実はカクカクシカジカなんだよ」

「分かりました、この変態犬耳女がストーカーなのですね」

「……オオカミ耳」

「いや多分違うし、凜世もツツ」どこがおかしいよ」

「じゃあ言葉を濁さずにちゃんと書いて下さい!」

「でもなあ…、凜世、言ってもいいか?」

「……生徒?」

まひるを指差す凜世。

「ん?まひるの事か?まだ中学3年生だから生徒じゃないよ」

「……ならいい」

お許しも出たところで。

「実はな……」

「なるほど、つまり2人の仲を例えたとしたら『狩り友』という事です
ですね」

「ああ」

「つまり恋愛感情はないと、そういう訳ですね」

「ああ」

「……勝は群れの仲間」

「ちょっと凜世、ややこしくなるから喋らないで」

「むむ、群れって家族って事ですか!？」

ああ…聞こえてたよ。

「……だから一族で挨拶を」

「ガルルルルウウ」

「待て待て、なんでこういう事になったんだ？凜世」

「……縄張りに入る事の許可を得たから」

ああ…、なるほどね…。

「人間界では家に呼ぶ事は友達の証であって家族の証では無いんだよ」

「……!!」

初耳だ!!という風に愕然とする凜世。

「という事だから大丈夫だよ」

「そうみたいですネ、なら私は部屋に戻ります。ドア直しておいて下さいね」

「ああ、分かったよ」

まひるが部屋に引っ込んで、2人+オオカミ沢山になった時、

「……勝」

「おう、なんだ？」

「……諦めないから」

「???」

そう言つと、踵を返してオオカミと一緒に走り去っていった。

「おい……勉強するんじゃないのかあ……」

と言っても帰って来ることは無く。

今日は事なきを得たのだった。

6 ・ 平和な日曜日、とは行かない。

一連のゴタゴタの後、俺は久しぶりに寢床に着いた。

着いたのだが……

「なあまひる、この体勢どうにか出来ないのか？」

「絶対出来ません」

そう、俺はまひると抱き合った状態で縛られているのだ。

理由は言うまでもないが、まひるとそういう契約を結んでしまったからである。

「せめてさ、縄をほどくとかさせてくれると有り難いんだけど」

「いけません、寝ている間に寝返りをうつといろいろ面倒ですから」

「でもほどこないとお兄ちゃん寝れないんだよ」

ただでさえいろんな所に当たる状態のに、パジャマになってよりリアルに感じれるようになってしまっているのだ。

妹と言えど、やはり意識してしまう。

「寝れないのなら寝れるまで頑張ってください」

「この状態に慣れるまでに過労で死んでしまいそうだよ」

「なら文字通り死ぬ気で眠りについて下さい、そしてこの状態が当たり前のように感じるようになって、あわよくばまひるを襲ってあんなコトやこんなコトを……」

「ヤバい、そんな陰謀が潜んでるなんて考えもしなかった」

「そうでしょう、名付けて『既成事実作っちゃおう作戦』です」

「でもそれ本人に言ったら意味ないよね」

「あ…、でも欲望を抑えられないまで誘惑するので大丈夫です」

「その言葉は出来ればお兄ちゃん以外に使ってほしいな」

近親相姦なんて神話の世界だけにしたいぜ。

「とりあえず、この体勢を変えることはありませんから」

「さいですか」

「あ、もし抑えきれなくなった場合はロープをほどいても良いですよ」

「そんな事絶対起きないから!!」

という事で前述の通り、抱き合いながら寝る事になったのだが……。

ああ!!

髪の毛からシャンプーのいい香りが!!

柔らかく小ぶりの胸が!!

これまたしつかりしつっそれでいて弾力のある太ももが!!

という風に案の定誘惑されまくって一睡も出来なかった。

いつの間にか外は明るくなっていた。

寝るはずだったのにただただ疲れただけだった。

しかも縛られていたせいでむやみに動く事も出来ず、筋肉痛になってしまった。

まひるはというと、

熟睡していた。

しかも心なしか肌がいつもよりツルツルしている気がする。

何故なのかは怖くて聞けないが。

妹の寝顔を見るのももう限界だし、そろそろ起こすか。

「とりあえず起きようか、まひる」

全く反応を示さないまひる。

「おい、まひる起きろ」

やっぱり全く反応を示さないまひる。

「起きないとイタズラしちゃうぞ」

「イタズラだったら存分にやっちゃって下さい」

「起きてるね」

「起きてません」

「寝ている人間は喋らないはずだよ」

「これは寝言です」

「寝言だったら返事は出来ないはずだよ」

「じゃあ一種の催眠にかかってるんです。返事に全て答えてしまうという」

「なら着替えるから一旦ロープをほどこうか」

「このまま着替えてもいいですよ？」

「まひるは良くてもお兄ちゃんはダメなんだよ！！さあ、ほどこうか」

「無理です」

「何でだよ」

「だって……、ほどけないように細工をしましたから」

へ？

「ちょっと待って、どういこと？」

「ちょっとやさつとじゃ結び目がほどけないようにと少々複雑に口
ブを縛らせてもらいました」

「ちょっと……！どうすんの……！」

「まひるはこのままでいてもいいんですよ？」

「ダメだから、社会的に死ぬから。というか完璧起きてるよね」

「あ、はい、起きてます」

「ならとりあえずハサミを取りにいくのか」

ほどけないなら切る他ないだろう。

「でもハサミって家にありましたっけ」

「俺は学校に荷物全般置いてきてるから」

「まひるもです」

なんだかんだ言っ て似た者兄妹だった。

「ああ…、どうしよう」

「プラスチックのハサミならあるんですけどね…」

「他に刃物っていうと包丁ぐらいか」

「怖いから嫌ですよ!-!」

「分かってるよ、じゃあ……買いに行くしかないだろうな」

「でもどうやって買いに行きます？流石にこの姿で街を歩きたくはないです」

「まあ誰だってそうだろうな」

「せめて着替えてからですよね！」

「ちょっと感性がズレてるようだけどね」

あの後いろいろ協議した結果、近くのコンビニに買いに行くことになった。

そして行く方法なのだが……

「まひるは前も後ろも見えないので合図宜しくお願いしますね」

「ああ、分かってるよ」

一回り大きな服を羽織り、まひるを覆い隠すようにしたのだ。

そうすれば、やや不自然ではあるが、まひるが抱きついていない状態である事はまずバレる事はない。

が。

「ねえー、あの人どうなってるの」

「こらっ！指差さないの」

視線が痛い、痛すぎる。

早く移動しようにも、

「……漏れるのでゆっくり動いて下さい」

まさかの尿意ときた。

これはもうどうしようもない。

つまりだ。

拘束が解けないとトイレに行かせる事が出来ずにまひるがお漏らしをしてしまう。

だけでも急げば急ぐほどお漏らしする確率が上がる。

ああ！なんだこのジレンマ！！

ああ！もうこうなったら心の中だけでもあの言葉を叫ぶしか無からうて！！

行くぞ！！

1、2、3。

メディーーク！！

(死亡フラグ 7 + 1 = 8)

(ジャーーーーア)

「ああ…何だか、いろんなモノと一緒に出たような気がします……」

「俺も気力体力ともにマイナスゲージに振り切ったよ……」

(死亡フラグ 8 - 1 || 7)

本当にギリギリだった。

家から500メートル先にあるコンビニまで20分。

コンビニに入ってからハサミを買うまで5分。

トイレを借りてロープを断ち切るまで5分。

計30分もの時間を費やして、遂にロープの呪縛から解放されたのだった。

「これからはこうならないようにしてね」

「はい、もうハサミを買いましたので寝る時には寢床に置いておけば万事オーケーです」

「そっちに行っちゃた!？」

ロープで縛るのを止めようという思考は無いのね。

「ロープで拘束しない限り安心出来ませんから」

「まあ良いんだけどね、お兄ちゃんも承諾しちゃったから」

そしてこれから先もまひるに恋心を抱く可能性など皆無だから。

とまあこんな具合に、人生の山場というにはちょっとちっぽけでしよばいハプニングを乗り越えたのだった。

7・嵐の前の静けさとはこの事だ。

人生史上最もしょばいハプニングを乗り越えた後。

「このまま外でお昼にしませんか？」

まひるがふと、こんな提案をした。

「そうだな、せつかくの日曜日だしな」

外に出ている間は縛られずにすむしな。

「なら、とりあえず手を繋ぎませんか？」

「まあそれぐらいなら」

と言って俺はまひるの手を取る。

（ガチャ）

すると、まひるが俺の左手首に手錠を取り付ける。

つてええええええええ！！

「なんでこうなったかな、まひる」

まひるは俺の発言もお構いなしに、今度は自分自身の右手首に取り付ける。

「これで安心して手を繋がますね」

「うん、既に繋がってるけどね」

「重箱の隅をつつくような真似をしていると嫌いになりますよ？」

「お兄ちゃんにとっては全く重箱の隅じゃないんだよ。それから、嫌いになってもらうのはこっちからしたら好都合だし」

自分が矛盾している事を言っていると気付かないのだろうか。

「そ、それは困ります」

「だろ？だったら手錠を外してくれないかな。食べる時にも支障が出るだろうし」

このまま外に出たらまた視線が降り注ぐだろうし。

「はい…、兄様がそうおっしゃるのなら外します」

と言って、朝から着ている寝間着のポケットの中を探す。

って、忘れてたああああああ！！

俺達、さっきまで縛られてたからすっかり頭の中から抜けていた。

「良く考えたらこの服装じゃ店に入るところか、家に帰ることすらままならないよ！！」

そつ、俺達は今寝間着を着ているのだった。

中国には寝間着で徘徊するような街もあるらしいが、日本には生憎そついう場所もない。

つまりだ。

店で食べるには1つの問題をクリアしなければならない。

一、服装をなんとかする。

「申し上げづらいのですが…」

「ん？何」

「鍵が見つかりません」

追加。

二、手錠をなんとかする。

これらの問題を打破するのは……。

うん、無理だな。

「なあまひる、今日は一旦帰らないか？お昼はお兄ちゃんが作るからさ」

「ダメです、せっかくの久しぶりのデートなのに、容易く終わらせてたまるものですか」

「ちょっと待て、なにやら不穏な言葉が聞こえたんだけど。デートって……、もしかしてコレの事？」

「当たり前ですよ！！」

えええ？

兄とコンビニまで謎の格好で行ってロープの束縛から解放される、という行為をデート！？

「まひる、お兄ちゃんはどうとうまひるを病院に連れて行かないといけなくなつたよ」

「何でなんですか？ただただ兄様を異性として見ていただけじゃないですか」

「それが駄目だと言っているんだ!」

「あ、訂正します。好きな異性です」

「もっと質が悪くなったよ!」

「とにかく、まひるは帰りたくありませんから」

うゝん、困った。

さて、どうするかな。

服は買うしかないか。

手錠は……

ハサミで切れないかな。

と考えつき、持っているハサミで手錠を斬りつけてみる。

だがビクともしない。

「そりゃあそうですよ、地球上で一番硬いとされているダイヤモンドでも傷つけることの出来ないと言われている金属が使われていまずから」

「無駄に高スペックな手錠を使わないでくれるかな!？」

値段とか大丈夫!？」

「これはまひると兄様に繋がれている、運命の赤い糸の強度を示そうと思ひまして。なので、たとえこの手錠が100万円だったとしても全然苦ではありませんでした」

「100万円ってどうやって稼いだ!？」

まだ中学生だからアルバイトは出来ない筈だろ!？」

「大丈夫ですよ、アルバイトはしてませんから」

はあ…、良かった…。

「って全然良くないよ！…どこから湧いてきたの100万円!？」

まさか…、援交？

いやいやそんな事あって欲しくない、あるわけがない、あってはならない！！

「ああ、あの方のテクニックは凄かったです」

オーマイガーッ！！

やっちまった、俺の妹が汚されてしまった！！

「いったいドコのドイツだ！！ぶん殴ってやる！！」

「あ、あのう…」

「なんだ！！早くお前を壊した犯人を言え！！」

「それがですね……」

「言わないように口止めされているのか！？大丈夫だ！！お兄ちゃんがソイツを殺してお兄ちゃんも死んでやるから！！」

「嘘なんですよー！！」

はい？

「だから！あの方とかテクニクだとか言っつのは嘘なんですよー！！」

「なんだ嘘か……」

安堵感と疲労感が一気にこみ上げてきて、俺は遂にはしゃがみ込んでしまった。

だが。

「なんで嘘をついたのかな、お兄ちゃんに」

「ほ、本当はお兄ちゃんが慌てるのを見たかっただけなんですよ！でも、アソコまで怒り狂うとは……」

と、まひるは手をあれやこれやしなから説明する。

「だって実の妹がそこらへんにいるオッサンに汚されたと思ったら、妙にイラついてな」

「もう、まひるは兄様一筋ですからその心配はしなくても良いですのに」

「それは一番問題だなー!」

「なんだっ たら兄様の手でまひるを汚——」

「却下」

「……却下されるのは分かってましたよ、でもまひるは諦めません、たとえそれが犯罪であろうと——!」

「そこは諦めて——!」

一段落したところで、もう一度これからどうするかを考えてみる。

手錠については諦めるしかないので、とりあえず服を買いに行くことにした。

だが、どうやって？

「もう一度2人羽織をすればいいんですよ」

「まあそうするしかないか、じゃあドコに行く？」

「それぐらいはエスコートして下さい」

「デートという形は崩さないのな」

まあ、妹の頼みとあらば聞いてやらんこともない。

それならば兄らしく妹をエスコートしてやろうじゃないか。

だが、気乗りしたせいであんな事になるとは思ってもみなかった。

8・台風が来るぞ！イノシシ型のな！！

コンビニを出て30分。

駅に近いため、交通の便が良く、大型電気店やデパートもある、オールマイティーな街、高寺園。

俺達はその場に来ていた。

「なるほど、ここなら服も買えますし、食べる事も出来ますね」

「家から遠いってのがネックだけどね」

俺達は値段が手頃そうな店を見つけ、そそくさと入店する。

店内はチャラチャラしているというわけでも、といって大人びているわけでもなく、清楚で学生が入りやすいような感じであった。

その証拠に学生っぽいカップルや、女の子グループや、晴美が……

あれ？可笑しいな、今何か見てはならないモノを見た気が……

もう一度見回してみると、学生っぽいカップルや、女の子グループや、晴美が……

オーマイガッ!!

(死亡フラグ 7 + 1 = 8)

なんで晴美がいるんだよ!!

ヤベーよ! 見つかったら死んでしまう!! 社会的に!!

……まあすでに死んでるのかもしれないが。

まあとりあえず、今ココで鉢合わせしてしまうのは得策ではない。

となると、考えつく選択肢は…

- 1 ・店を替える
- 2 ・買って即出る
- 3 ・試着室に飛び込む

ぐらいだな。

なら順に考えていくとしますか。

（どうも、）今回から新装オープンいたしますー 中崎勝の妄想タイム、これからもご贖いの事、宜しくお願いします）

if・1を選んだら

「（店替えるか？）」

「（なんで替える必要があるんですか？『男に二言は無い』って言うでしょ）」

「（まだこの店と決めたと言ったわけじゃないからその発言は正しくないよ）」

「（なら一度やり始めた事をほっぽりだすんですか？）」

「（ほっぽりだすだなんてそんな…）」

「あら勝じゃないの、どうしたのこんなところで、というかそのお

腹何？」

(TIME OVER)

「いや、あの、それは……」

「何か怪しいわねえ…、見せなさい」

「べ、別に大した事じゃないから大丈夫だよ!!」

「ますます怪しいわ、良いから見せなさい」

と言って、無理やり上着を脱がせに来る。

「お、幼馴染に犯されるううううう!!」

抵抗はするが、耐えられるはずもなく、まひるを晴美に見え

「これはどういふことなのかしら?……………マアアアアアサアア
アアアルウウウウウウウウ!!……………」

（これから先はグロすぎて描写できません　後はご想像にお任せします）

うん、無理だな。

時間も無いし次行くぞ。

（さあさあ始まりました中崎勝のモーソー爆発っ！のコーナーです。司会を務めさせていただくのは私、Ｔ（略）

if・2を選んだら

そこら辺にあるＴシャツとジーンズを二着ずつ取って即レジに直行。

「あ、スミマセン。コレとコレ下さい」

「かしこまりました。え〜と8400円になります」

「わかりました」

「（ウウウ、ウウウ）」

すると体の中（正確には服の中）でまひるがうめきだした。

「（なんだまひる、またトイレか？）」

「（違いますよー！ただ、せっかくのデートでもらう服なのにＴシヤツにジーンズというのは流石に……。もうちょっと女の子らしい服が欲しいです）」

「（緊急事態なんだから仕方ないだろ？また今度買ってやるから勘弁してくれ）」

「（今度じゃだめなんですー！）」

「あら勝じゃないの、どうしたのこんなところで、というかそのお腹何？」

（TIME OVER）

「いや、あの、それは……」

「何か怪しいわねえ…、見せなさい」

「べ、別に大した事じゃないから大丈夫だよ!!」

「ますます怪しいわ、良いから見せなさい」

と言って、無理やり上着を脱がせに来る。

「お、幼馴染に犯されるううううう!!」

抵抗はするが、耐えられるはずもなく、まひるを晴美に見見され

「これはどういふことなのかしら?……………マアアアアアサアア
アアアルウウウウウウウウ!!……………」

（これから先はグロすぎて描写できません 後はご想像にお任せします♪そしてコピペは神です）

……。

一応3もしくな。

(さてさて、中崎勝の足掻き場によっこそおいでらっしゃいました。
私支配人のT(ry)

if・3を選んだら

そこら辺にあるTシャツとジーンズを二着ずつ取って即試着室へ。

中に入って上着を脱ぐ。

「プハア…、死ぬかと思いました」

「元は言えばまひるのせいだろ」

「認めざるを得ませんが、やってしまったモノは仕方がないじゃないですか!!そもそも兄様がまひるに振り向いてくれないから……」

病みスイッチオン。

「まひるーっ、一旦落ち着こうか」

「兄妹の壁なんて私達には通用しません」

「通用するから!!」

「たとえ兄様が拒んだとしてもまひるは兄様の遺伝子を組み換えて子供を作ります!」

「それはクローンって言うよね!!」

……なんか面倒くさくなってきた。

よって、実力行使始め。

「もし兄様がまひるとコトを起こつ、ハヒヤ、ハヒヤヒヤヒヤヒヤ
!!ハハハハハヒヒッ、ヒヤヒヤヒヤハッハッハ!!」

(シャッ)

「どうされましたかお客様っ、つてええええええ!!」

その時、カーテンの開く音により俺の人生のカーテンは閉ざされた

のだった。

―警察直行END―

（やっぱり報われなかった中崎勝でした 最後の言葉がクサいのは勘弁してやって下さい）

……。

ですよー！。

だいたい今まで逃げ道ってあったっけ？

…… 某ライトノベルの主人公の口癖を引用させてもらっ。

不幸だあーっ！！

（死亡フラグ 8 + 1 = 9）

「あら勝じゃないの、どうしたのこんなところで、というかそのお腹何？」

やっぱり話しかけてきた…。

もう社会的には死んでるし開き直ろう。

「ああ、実はな妹がこん中にいるんだ」

「???」

まだ理解していないようだな。

なら理解させてやろうじゃないかあ!!

「ちょっと来い」

体裁は保つため、一応試着室に招き入れる。

「バババババカッ、試着室でナナナナニをしようっていつの!」

だが、全く入ろうとしない晴美。

「大丈夫だつて、何もしないから。後声デカイ」

「デデデッ、でも狭い部屋にフフフッ、2人って」

「いや、3人だが？」

「???」

ああーっ、面倒くさいな。

とりあえず引つ張り込んじゃえ。

と、説明するのをあきらめ、晴美の手を引つ張った。

「えっ、チヨチヨチヨチヨ、ちょっと！いきなりダダダッ、大胆ねええええ……（嬉しいけど）」

「なんか言つたか？」

「何でもないわよ！……で、これはどついう事なのかしら？」

「実はな……」

と言って俺は上着を脱ぎ出す。

「ホホホホ、本当にここですのー!？」

何故うるたえる。

「ここ以外どこですと言った？」

「そりゃあさあ……ホテルとかさ……」

「ホテルに行く必要なんてどこにある？」

金の無駄遣いだろ。

というか上着一枚脱ぐだけでホテルに行くんだったらどのホテルでも稼働率100%を達成するだろうぜ。

「もういいわよー!…その代わり……優しくしてね」

「つまり……、殺していいわよね？」

「よくない!!どうしてそうなる!？」

「勝がお人好しだからでしょ!!もう……、もっと監視を強化する必要があるわねえ……」

「それだけはマジで勘弁して下さい」

その後。

晴美に代わりに服を買ってもらい、そのまま試着室で着替えを済ませた。

済ませたと言っても、手錠のせいで引っ掛かって脱げないのでハサミで切り刻んだのだが。（ここでハサミが役に立ったという事実）

……まひるの裸には興味ナイヨ、兄ダカラネ、カタゴトの理由は無いから気にするナヨ。

そして今は店の外である。

「本当に助かったよ晴美」

「まあ？当然の事をしたに過ぎないわ」

「『優しくしてね』って、プップップッ」

あ、まだウケていたのかまひる。

「どれだけ引きずるのよ！！……トラウマになりそう」

「まあ、その何だ？ご愁傷様です」

「何がご愁傷様よつ！！勝には罰が必要のようね……」

と、晴美がポーチから取り出したのは二個の輪っかを鎖で繋いだ物。

つまり…、手錠。

（ガチャ）

すると、晴美が俺の右手首に手錠を取り付ける。

「って、またあああ!？」

晴美はそんな俺の悲痛な叫びもお構いなしに今度は自らの左手首にもう一つの輪っかを取り付けた。

……俺はどこの死刑囚だよ。

「いやー、まさか明日使おうと思っていた拘束道具が役に立つなんて夢にも思わなかったわ」

「何をされるんだっ……」

明日が不安になってきた。

「まあそれはともかくとして、これで心置きなく監視できるっつものよ」

「……もう勝手にしてくれ」

とまあこんなわけで。

爆弾が2個に増えましたとさ……、はあ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7479x/>

死亡フラグの回避方法を教えてくれ

2011年12月9日03時00分発行